

## カタルーニャ・ミステリー

### 『黒い嵐』

岡田 多喜男

#### 一、著者テレザ・ソラナについて

スペインの北東部にカタルーニャ自治州があります。首都はバルセロナです。サグラダ・ファミリア教会を設計したガウディや、画家のダリ、ミロ、ピカソ、世界最高のチェリストと評価されるカザルス、世界の三大テノールの一人カレラスなどで知られる豊かな文化を誇る地域です。

言語は、ラテン語から生まれたカタルーニャ語が話されていますが、同じくラテン語を起源とするスペイン語、イタリア語、フランス語、ポルトガル語等とは姉妹言語に当たりません。

カタルーニャ語による文学にも長い歴史がありますが、中でも光彩を放つのは、一五世紀末に出版された騎士道小説『ティラン・ロ・ブラン』でしょう（岩波書店から田澤耕氏の完訳が出ています）。セルバンテスは、『ドン・キホーテ』の中で、登場人物の口でこの作品を激賞しています。

現在も、カタルーニャ語による小説、詩が盛んに出版されています。私はつい最近、女流作家テレザ・ソラナの書いた推理小説を三冊読みましたが、その中でも、二〇一〇年に出版した『黒い嵐』という作品に一番惹かれました。原題は *Negres Tempestes* だ。

彼女は、一九六二年バルセロナ生まれ、バルセロナ大学で哲学・古典言語を学んでいます。当初は、主に英語、フランス語からの翻訳に従事していましたが、二〇〇六年、四四歳の時に、処女作『不完全犯罪』を出版しました。エドゥアルドとボルジャという双子の探偵が登場します。推理小説、探偵小説の面白さは、主人公の探偵の個性に掛かっていると思えますが、彼女は双子の探偵を創作したことで成功を収めました。



テレザ・ソラナ

彼女は、この双子探偵が活躍する作品『天国への近道』（二〇〇七）、『禅の時』（二〇一〇）『婚礼の鐘』（二〇一六）を発表すると並行して、二〇一〇年には、カタルーニャ警察の

警部補ノルマ・フォレストルが活躍する、社会派推理小説『黒い嵐』を発表、更に二〇一四年にも、同じ警官が主人公の『蝶の家』を発表してきました。彼女は推理小説の他にも、短編集『血と肝臓の七つのケース』なども発表しています。

## 二、ワルシヤワ労働歌と黒い嵐

この本を手にして私が驚いたのは、巻頭にワルシヤワ労働歌の冒頭部分が掲げられていたことです。

黒い嵐が 大気を揺さぶる

不吉な雲が 視界を奪う

私は、学生時代に、いわゆる六〇年安保の際、デモに参加、この歌を歌ったのを思い出しました。日本語の歌詞の冒頭部分はまだ覚えています。

暴虐の雲 光を覆い

敵の嵐は 荒れ狂う

ひるまず進め われらが友よ……

この小説の中で、この『黒い嵐』とは、ある老人が自分の手記につけた題名でした。彼、ビクトル・ポルタは、幼少の頃、父母を失いました。一九三六年に始まったスペイン市民戦争が、一九三九年にフランコの勝利で終わった直後のことです。絶望した彼はメキシコに渡ったのですが、四〇年後妻の死を契機にバルセロナに戻り、一念発起して父母の死の真相を探り始めました。そして、昔を記憶する何人かの老人か

ら聞きだしたのは、衝撃的な事実でした。

父にはパウ・ムンタネルという友人がいたのですが、彼はそれまでは敵とみなしていた右翼のファランへ党に、戦後すぐに入り、父をアナーキストとして非合法的な軍事活動をしたという、ありもしないことで訴え、父に二〇年の強制労働という判決を受けさせました。父は二年しか耐えられず獄死してしまいました。ムンタネルが父を裏切ったのは、母への横恋慕でしたが、母はその恒常的な脅しや言い寄りに耐えられず身を投げて自殺してしまいました。

ビクトルは、この二〇〇ページにも及ぶ膨大な手記に、アナーキストの賛歌として知られる『黒い嵐』を題名につけましたが、すぐに出版社に持ち込むことはせず、写しを二部作りました。その一部を長年の友、フランセスク・パラリヤダに送りました。彼は定年退職寸前の大学教授でしたが、市民戦争の研究の大御所で、アナーキストにも敬意を表していましたから、ビクトルは事実確認のため、教授に写しを送ったのです。そして、もう一部をパウ・ムンタネルの孫のジェラルド・ムンタネルにこれも事実確認のために送りました。

ところが、これを読んで、ジェラルドは直ちにビクトルを殺害し、この手記を回収することを目論みました。当時ムンタネルは、カタルーニャきつての化学企業を経営していましたが、このような手記が公表されれば、祖父の汚い政治的タレこみやセクハラが明らかにされ、更には彼らの富の起源が

疑問視される怖れがあったのです。

彼は、この殺人のため、ある麻薬中毒の無頼弁護士を大金の報酬で雇いましたが、ビクトルを殺してみると、『黒い嵐』は、友人のパラリヤダ教授にも送られていることが判明、教授をも殺害する必要に迫られました。更に、この無頼弁護士が、より巨額の報酬を要求し脅しに掛かったことから、ムンタネルは彼も射殺してしまいました。

これらの三連続殺人事件の捜査を担当したのは、カタルーニャ警察の警部補ノルマ・フォレストルでした。彼女は、文人人類学者から警察に転身した変わり種ですが、法廷医である夫ウクタビの協力も得て、事件の真相にこのように迫っていったのです。最後の詰めは、この手記『黒い嵐』を読むことでした。

しかし、手記は写しともども犯人側に渡っていて手が届きません。そこで彼女たちが考え付いたのは、ビクトルが、この手記を保存の為、自分のパソコンにメールしていたのではないか、パソコンも盗まれていたが、これを取りだせないかという事でした。これを解決したのが、ノルマの叔母のマルガリダで、彼女は修道院暮らしながら、自室にコンピュータを隠し持つマニアで、見事ビクトルのメール・アドレスとパスワードを調べ上げ、それをノルマに教えました。ノルマは、パソコンから『黒い嵐』を取りだし、自分の推論が正しかつたことを確認すると、警察署長とともに判事を訪問、ムンタ

ネルの自宅捜索の為の令状の交付を求めました。しかし判事には拒絶されてしまいます。

体制派の判事が言うには、ムンタネルをこの事件と結びつける証拠は全くない。このような状況で彼を被疑者とするのは、余りにも遠くに行き過ぎだ。ノルマはビクトルの手記を非合法な手段で入手しているので、これは証拠にはならない。すでにこの事件は、麻薬中毒の泥棒の殺人であり、犯人は麻薬取引の縄力で清算されたものだと結論が出ている。これら三件の殺人事件は裁判の秘密下であり、この手記を公表して過去を暴露することは、ただ単に無実の人を傷つけ、さらにはフォレストル警部補のキャリアを傷つけるだけだ、と云うものでした。

ノルマは、最後の手段として、ジョルディ・パラリヤダと会いました。彼は殺されたフランセスク・パラリヤダ教授の息子で、たまたま、パウ・ムンタネルの孫娘のモニカと結婚し、力を合わせてムンタネル化学会社の発展に力を尽くしてきましたが、いずれも清潔な人柄で、これら一連の殺人事件とは全く無関係でした。

ノルマは、フランコ体制下で犯されたこの悪行を弾劾し、ビクトルの祖父の名誉を回復するため、『黒い嵐』の公表を提案しました。しかし、ジョルディは、熟慮の末、拒絶してきました。拒絶の理由は、判事の主張と同じもので、事件にはすでに結論が出されている。今、これを暴露することは、苦

痛をもたらずだけである。自分にも守らなくてはならない家族がいる。義兄のジェラルドはアメリカに渡り向こうで住んでいる。ピクトルの父母への不当な行為は、もうずいぶん昔になされたことだ。こうした過去をいま掘り返して何の役に立つだろうか？　と言うものでした。

その拒絶は、ジョルデイが自分の父を殺され、かつ、父のパラリヤダ教授が、その生涯の大部分を、市民戦争の忘れられた死者たちに正義をなすことに費やした学者だったことを思うと、ノルマには信じ難かったのです。そこで、ノルマは奇想天外な手を打つのですが、それはこの推理小説の大団円ですから、ネタバレは避けたいと思います。

### 三、スペインの「歴史記憶法」について

この小説で作者が訴えたかったことは、フランコ独裁政権の圧政によって、不当にも殺害され、名誉を奪われた人々を忘れてはならず、その名誉回復に努めなくてはならないという事に尽きると思います。

スペインでは、一九三六年七月に、当時の共和制政権に対し、フランシスコ・フランコの率いる反乱軍がクーデターを起こし、内戦が勃発しました。共和国政府はソ連が支援し、欧米の市民知識人も数多く義勇兵として参戦しました。その足跡は、ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』、ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』などに見ることが出来ま

す。

一方、フランコのファシズム陣営にはドイツ、イタリアが支援、直接参戦もしました。内戦は一九三九年三月にフランコ側の勝利で終結、スペインはフランコの独裁政権となり、敗者となった共和派、特に最後まで戦ったカタルーニャは残酷非道な弾圧を受けることになりました。

フランコは一九七五年十一月二〇日に死亡し、民政移管がなされたものの、ノルマによれば、民政移管後も、フランコ体制派には無言のうちに特赦を与え、勝利者たちの残忍な行為の記憶を消し去り、共和派の人たちの苦しみを黙らせた。双方いずれにも、良い者も悪い者もいた、英雄的行為も野蛮な行為も、双方いずれの側にもあったという理論が勝利し、従ってフランコ派も共和派ともに過去を恥ずべき十分な動機があり、互いに古傷を暴きあうよりも、ページをめくった方がよいとされてしまったのです。

一九三七年四月二六日に、内戦下のスペインで、ナチス・ドイツの空軍が、バスク地方の小都市ゲルニカを空爆しました。非戦闘員を多数殺戮する、人類史上初の無差別爆撃とされ、ピカソが著名な絵画『ゲルニカ』を描きました。しかし、右派の人たちはこのことを非難されると、共和派も一九三六年に、マドリッドに近いバラクエリヨスで、多数のフランコ派の人々を惨殺する事件を起こしたではないかと反論。共和派が、殺された無辜の民や婦女子の無念さを訴えると、右派

は、殺害された多数の神父や燃やされた教会を挙げて反論する有様だったようです。そして、学校では、市民戦争のテーマには、誰の感受性も傷つけないため次第に及び腰になっていったと言われています。

しかし、社会労働党が政権をとると、二〇〇七年にいわゆる『歴史記憶法』が制定されました。妙な名前ですが、正式名称は『内戦及び独裁期に迫害あるいは暴力を受けた人々のため、権利を承認し、拡大し、措置を求める法律』です。この法律について、ノルマは次のように批判しています。

「この法律は誰にも気に入らなかった。犠牲者協会は、これを欠陥のある、不十分な法律だと言ひ、保守派の政治家たちは反対を唱えた。彼らの多くは、高名なフランコ主義者の息子や孫たちで、公には告白できないものの、今もフランコ体制を称賛し、仲間内ではそれを自慢しあっているのだ。彼らの言うには、市民戦争の犠牲者など、もはや誰の関心も呼ばない。長い年月が経過しているし、民政移管協定は、忘却と沈黙を保証している。排水溝から骨を掘り起こすようなことは、ただ戦争の古い亡霊を再び駆けさせるだけだ。両方の陣営に善きものも悪しき者もいた。そして、左派と自任するインテリの中にも、共和派陣営にも行き過ぎがあったと認める者も出てきた。しかし、私は、フランコ主義者たちが和解の名において、彼らの犯した犯罪の重要性を軽減するため、歴史を書き換えようとするとする試みには怒りを覚えた。」

テレザ・ソラナが、この小説を書くきっかけはこの法律への不満だったようです。

#### 四、主人公ノルマ・フォレストルと『悲しき熱帯』

ノルマはカタルーニャ警察の警部補です。祖父のジャックは、イギリスのマンチェスターで生まれ育った貧しい青年でしたが、スペイン内戦が勃発すると、親友のボブと共に、共和国軍に従軍するため、開戦から三か月後には、黒い旗の都市、バルセロナに着きました。黒い旗というのは、白い旗、すなわち降参の反対で、勝利するまで、あるいは死ぬまで戦うことを意味していました。

明るい未来が語られる感動の瞬間で、ジャックはここで知り合ったカタルーニャ娘のセントと結婚、彼女が子供を身ごもったことを戦地で知りましたが、ボブは戦死し、ジャックも共和国の敗戦とともにフランコ軍に逮捕され、処刑されてしまいました。娘のミミの生まれる前でしたが、娘はジャックの青い目の色を受け継ぎました。

ミミはヒッピーで、シングル・マザーとしてノルマを出産しましたが、やがて富豪と再婚、今、ノルマたちはその遺産の豪邸に住み、警察の仲間からイギリスの貴族の末裔かと思われたりしています。

この一族の面白いのは、女性に全てオペラのヒロインの名前を付けていることです。ノルマは、オペラ『ノルマ』に出

てくるガリアの巫女で、母のミミは『ラ・ボエーム』の、祖母のセントは『さまよえるオランダ人』の、娘のビオレタは『椿姫』の、それぞれヒロインです。もつと前には、アンチゴナやエレクトラまでいたというので凝っています。

ノルマはギレムとの間にビオレタをもうけましたが、彼がホモセクシユアルだと判明し離別、再び恋に落ち結婚したウクタビは、たまたまギレムの兄でした。ウクタビは沈着な法廷医で、ノルマの捜査にも多大な協力をします。

ビオレタは、ウクタビが実父で、ギレムが叔父であるかのように、可愛がられて育ちましたが、いまや一八歳、無人住宅を不法占拠する若者たちウクーパスの仲間入りをして皆を心配させています。

ノルマを取り巻く家族はいずれも興味深い個性派で、この小説には『ノルマとその家族』という副題をつけた位です。ところで、彼女は文化人類学者から警官に転身した変わり種ですが、ある日、部下のガブリエルが彼女を自宅に訪ねた際、レヴィ・ストロースの著書『悲しき熱帯』について話しかう場面があるのですが、彼女の思想、人柄をよく語っているのです。その部分を引用します。

「ガブリエルは、ノルマがかつては文化人類学を学んでいたことは知っていた。しかし、彼にとっては、文化人類学で連

想するのは、探險帽をかぶったイギリスの探險家が、ジャングルで釜茹でにされるシーン位のものだった。—あなたは、野蛮人と会ったことがあるの？ こう尋ねる気持ちになったのは、彼女の書棚に、レヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』の、四つの違った出版社から出ているのを見たからだ。二冊がフランス語、一冊が英語、一冊がカタルーニャ語だった。—文化人類学は、あなたの言う様に野蛮な部族の研究のみをするものではないわ。尤も今は『野蛮な部族』という言葉は使われていません。『原始社会』と言うの。—それで、あなたはそこに行ったことがあるの？—博士論文を書いていた時、四週間、ブラジルのヤノマミ族の所で過ごしたわ。—えっ、彼らは人食い人種でしょう？—正確には、同一部族食人種です。ヤノマミは、同一部族の死者しか食べません。それは一種の葬儀なんです。—ということとは、埋葬する代わりに、釜で茹でて食べてしまうの？—釜で茹でたりはしません。骨を焼いて、その粉を椰子の実に混ぜて、パスタを作るの。ピューレみたいな物ね。—そのピューレを食べるのかい？—そうです。それを食べます。—なんて野蛮なんだ。ガブリエルは、嫌悪のしかめっ面をした。—物は取りようです。カニバリズム（食人風習）というのは、基本的には宗教儀式なんです。食人風習をかつて行っていた部族、あるいは今も行っている部族は、死者を食することにより、敵の強さをわが物にしたり、家族を敬ったり、死者が戻って来て害を与えることの



山本宣治記念碑

ないように願ってそうするのです。食料として食べるのではありません。私たちが動物を殺して食べるのとは訳が違います。彼らは、死んだ人しか食べません。全く違います。——いずれにしても、僕は遠慮します。と、ガブリエルは、心から納得した風でもなく言った。そして、しばらくの沈黙の後、急に気が付いたように言った。——でも、あなたは、人肉の試食はしなかったんでしょう？（以下略）」

## 五、山本宣治碑 「生命は短し、科学は長し」

テレザ・ソラナは、大学で哲学・古典言語学を専攻しただけあって、その作品にもラテン語の世界が時折顔を見せます。

この小説にも *Ars longa vita brevis* が引用されています。これは、日本で最も人口に膾炙するラテン語の格言かと思われませんが、一般には「芸術は長し、人生は短し」と訳されています。しかし、インターネットで『山下太郎のラテン語入門』

について語ったもので、「人生は短い、医学を習得するのに必要な年月は長い」というのが、本来の意味だったのだそうです。要するに、「少年老い易く、学なり難し」を意味するものだったということでしょう。

私が驚いたのは、数年前に家内と長野県上田市の別所温泉に行った際、なんとこの格言を座右の銘としていた山本宣治の記念碑があるのに気が付きました。文言は少し変わっていつ、*VITA BREVIS SCIENTIA LONGA*（人生は短く、科学は長い）となっています。

山本宣治は、京都宇治の料亭の息子として生まれ、京都大学などで生物学者、性医学者として教壇に立った後、昭和三年の総選挙に労働党から立候補して当選するや、治安維持法にただ一人反対し、「山宣ひとり孤塁を守る」と奮闘しました。右翼の凶刃に倒れたのですが、上田には講演に訪れたことがあり、土地の人から愛され、この石碑が立てられました。旅館の女将さんから聞いたのですが、戦前官憲からこの石碑を破壊するよう迫られた際、地元の人が、地面に埋めて隠し、戦後随分経ってから、掘り出して再建したのだそうです。

この碑文を眺めた頃、私はラテン語の学習をまだ始めていませんでしたが、この文章なら、スペイン語の知識だけで十分読み取れますので、嬉しかったです。

をみますと、山下先生の解説では、これは、古代ギリシャの医者ヒポクラテスの言葉で、彼は芸術についてではなく、医学に